

第3回『民族共生の象徴となる空間作業部会』議事概要

日時：平成22年5月19日（火）14：00～16：45

場所：永田町合同庁舎会議室2

出席者：委員：佐々木部会長、川上委員、佐藤委員、篠田委員、常本委員

事務局：秋山審議官、内閣参事官ほか

傍聴：外務省、財務省、文化庁、水産庁、経済産業省、国土交通省、北海道

議事：

1 有識者ヒアリング

(1) ボン大学名誉教授 ヨーゼフ・クライナー氏（西洋人のアイヌ像）

- ・ドイツ、オランダ、スイス、オーストリアなど西ヨーロッパ諸国では、昔からアイヌに関する関心が高く、博物館でのアイヌ文物を多く展示しており、現在でも親近感を持っている。また、ロシアも多いが、北欧では珍しく、数は少ない。
- ・西洋人は、室町時代末期に間接的に初めてアイヌの情報を入手し、人間に富を与えてくれる森の神、恐ろしい山の精霊という二面性を持つヨーロッパの中性の観念と重なったイメージを持った。その後、啓蒙主義時代に、北太平洋探検者が詳細な報告書を残し、「高貴たる野蛮人」というヨーロッパの哲学の概念が重なった。文明の発達によって道徳を失うが、インディアン、アイヌなどは道徳を失っていない民族でヨーロッパ人の模範と考えた。
- ・現在の西洋人は、ヨーロッパの失われた自然と一致した生活や古き良き文化をアイヌが守ってくれているという感覚。アイヌは消えていく民族で、保護しなければならず、その義務は日本にあると考えている。
- ・ドイツでは、アイヌのコレクションを展示していない博物館は一流とは見なされない。また、中学や高校の教科書にアイヌが掲載されており、駅で売っているクロスワードパズルにアイヌの問いが載っているなど、ドイツ国民一般も知っており、親しみがある。
- ・象徴空間では、観光のためではなく、学問上正しいアイヌの世界や、本物の世界観に接する機会を作るべき。そうすると日本人だけでなく、海外の人々も来るだろう。

(2) 国立民族学博物館副館長 佐々木史郎氏（アイヌ文化の多様性、歴史性）

- ・アイヌ文化は、昔から変わっていないというイメージがあるが、自然環境や歴史環境に適応し、常に新しい文化を発展、創造させてきている。現在の国民が抱くアイヌ文化のイメージは、江戸末期のアイヌ文化のイメージ。
- ・アイヌ文化は、日本の社会、文化に影響を与えている。江戸時代などはサブカルチャーとしてアイヌ玉、木彫等が庶民レベルまで広がっていた。また、昆布（現在の関西の味の基本）や、防寒具や寒冷地での防寒技術など意識していないかもしれないが多くの影響を与えている。
- ・また、アイヌの存在により、古代、中世、近代の日本の独自の国家建設を可能とした。独自の中華世界の確立、対中国・ロシアの仲介役、近代化政策など、大きなレベルでもアイヌの存在が必要であった。
- ・現代を生きる人にとっての伝統とは、単に古いものを守り続けるのではなく、再生産、再創造、時には破壊が必要。消滅してしまっは、文化の維持、復興、発展はあり得ない。
- ・現代日本におけるアイヌ文化の位置づけとしては、音楽、舞踊等のクールなアイヌ文化、アイヌ現代文化の経済的な価値の付加等が考えられる。
- ・象徴空間は、アイヌの伝統生態系の復元事業ではないか。アイヌ文化の基礎を支える自然生態系と社会経済条件の整備が必要（生態資源の有効活用、伝統技術と現代技術を融合した狩猟漁撈活動、アイヌ経済の現代市場経済への接合等）。
- ・極東ロシアにおける伝統的自然領域の紹介。

2 意見交換

- ヨーロッパの人々がアイヌに関心を持ち、「森の神」として良いイメージを持ってくれているのは大変嬉しく、勇気づけられた。
- アイヌ文化の継承は、古くから伝わる精神などを伝える「伝承」の強化策と、昔からの「伝統」を学ぶことに加え、現代風にアレンジした文化、時代にあった文化を発展、創造するという「伝統」の可変性を認める両方の側面が必要と考える。
- 文化伝承、文化紹介の内容は、時代変容、世界や北方の周辺民族とのつながりなど、アイヌ文化の場合は、多様性、変容性をベースにすることが重要。
- 3つの機能（「文化伝承」、「文化紹介」、「連携・協働、体験・交流」）が有機的に連携する必要。歴史、文化を学習し、海、山、川などの自然観を体感し、内面の精神文化を学び、共有するなど一体的に感じられる空間となれば効果的。
- ヨーロッパの人々が持つある種ファンタジー的な、誤解に基づくアイヌへの関心、親近感を今でも持ち続けているというような観点も踏まえた上で、アイヌ政策を検討していく必要がある。
- 現代的なアイヌ民族の文化など、現代におけるアイヌ文化の位置づけや市場経済の中での位置づけは重要な視点。
- 改めて「共生」、「象徴」についてもう一度じっくり考えてみる必要があると感じた。アイヌ政策は、国民理解が進んでいない中で、我が国の実情や現代を生きるアイヌの実態を踏まえて検討する必要がある。いわゆる一般的な「共生」に通ずるものはあるが、先住民族という観点から、アイヌの課題はユニークな存在であり、一般課題とは異なるという視点を持ち続ける必要がある。
- ヨーロッパからは、和人とアイヌを等距離で見ている。我々は、中央と周辺という見方で捉えがちであり、参考になった。
- 多数者側から見て意義のある共生空間とは、多数者の文化も少数者の文化もお互いに影響し合って成長していくということを見せていく空間ということか。
- 音楽、舞踏など現代を生活しているアイヌの人々の文化の発展は重要。
 - ・日本の文化の中で狩猟文化は長い歴史を持っており、国民に理解してもらう必要。
- 象徴空間を検討するに当たって、アイヌ語を核にすることが重要。空間を活用したエコツーリズムなども考えられ、アイヌ語でアイヌの自然観を説明する人材を育成することなどが重要ではないか。
- アイヌ文化は常に変化している。博物館等の展示では、アイヌの人々や文化が江戸時代から変わらないというイメージを変える工夫や、アイヌ文化と周辺文化の流れがわかる工夫などが必要。
- 狩猟はイノベーションの歴史である。アイヌの狩猟の世界観と現代技術をミックスさせることも文化の発展にとっては重要。ライフルを使うからアイヌ文化ではないというのはおかしい。
- 共生空間の中で狩猟を行うなど、生きた形で文化を伝承し、紹介することが重要ではないか。弓や毒矢は使えないだろうが、ライフルを使っても、鹿をどういう空間認識や世界観の中で追っていくかなどは正しくアイヌ文化である。
- 文化はあらゆるものがワンセットとなっている。熊送り儀礼も、彫刻、料理などが一体となっており、続けていかないと失われていく。ニブフ、ウデヘなどの少数民族は既に一部の文化が失われている。
- 古い文化と現代の文化の両面を考える視点は重要。古い伝承技術と明治以来の新しい伝承技術の両方を展示し、比較するのはアイヌ文化が他の文化に影響されながら発展してきた変容を見せることが出来、面白い。

3 作業部会における合意事項

- ・今回は駐札幌総領事のダーナ・ウェルトン総領事、北海道環境財団理事長の辻井達一理事長にヒアリングをするとともに、「共生」、「象徴」という観点から、意義、具体機能の重点化等について議論を進めることとした。

4 その他 次回開催は5月28日（金）午後